

医療とスピリチュアリティ：死にゆく人々への心と魂のケア
MEDICAL CARE AND SPIRITUALITY: SPIRITUAL CARE FOR DYING PERSONS
臨床パストラルケア教育研修センター所長 Waldemar Kippes

薬物や手術の効かない病

幸せでありたいと願っていても私たちは困難に出会い、病気になり、死んでいく。「どうして私はこんなに苦しまなければならないのか」「どうして私の子供が死んだのか」「何のために生きているのかわからない」「この病気はパチが当たったためであろうか」「和解決したい」「許してもらいたい」「人間はなぜ苦しみ、死ななければならないのか」。このような状況を変えることができる薬学や精神医学を含む科学的医学、社会学や心理学に基づいている医療や治療、薬物や手術、解決（説明）や解放はない。こうした痛みはスピリチュアルなものであり、スピリチュアルな援助や癒しを要求するものだからである。

スピリット（スピリチュアルとはスピリットの形容詞）の定義

スピリチュアルケアを取り扱うことに関して、まずスピリット・スピリチュアルを定義する必要がある。

「スピリット」とは

五感や知性と理性で確認できる自分自身を含む現実がすべてではないことを悟らせ、

*そのような現実を超越した背後に含まれている存在意義や価値を把握させ、¹
人生の目標（天命）とそれに向かわせる舵および*

存在そのものとの一体感を与え、

更に自由意志に基づく責任ある行動を可能にする内面的な能力・パワーである。

それによってはじめて本能的・衝動的・宿命論的ではなく、人間としての責任をもって、ふさわしい、自分らしい生き方が可能になる。

五感で確認できる状況を超越させるもっとも中心課題となる要素は**希望**である。**希望**こそスピリチュアルなパワーとスピリチュアルな健康の現れである。

スピリットは「心」と「魂＝人間そのもの」に質的要素を与える。品位や尊厳、性格の強さや雄々しさ、勇気や気力、天命や使命、大和魂や和（日本）の心、武士道のような事

¹ 今、ここに居ることは、五感と知性で確認できるが、スピリチュアル・スピリットは五感や知性を超えてこの状況を把握させてくれる。現実を超えさせる機能や可能性は、特に困難に出会ったとき助けになりうるのである。病気、衰弱、老化や死は現実であっても、そのことがすべてではないことをスピリットが捉えさせてくれる。

柄はその有様をさしている。

スピリチュアルな痛み

「がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア ―がん患者の生命へのよき支援のために―」²において WHO は、がん患者に対する包括的医療に対して4つの痛みを取り上げなければならないと強調している。即ち、身体面、心理面、社会面、^{スピリチュアル}霊的な面。著者がそれに知的な痛みを加える。その中のスピリチュアルな痛みとして、次のことが考えられる。

- ・ 変えられないこと
- ・ 現在の解けない謎
- ・ 現在の解決のできない問題
- ・ 喪失すること
- ・ 人間が平等でないこと
- ・ 善悪、善意と悪意・責任・賞罰・報い・悪用・罪・負い目・償い・弁償・補償・許し・和解など
- ・ 自己の統一が不完全であること。

スピリチュアルケアはスピリチュアルな痛みに対するケア

スピリチュアルケアは以上のような痛みの元になる事柄を専門的に取り扱う行為である。即ち、

- ・ 変えられることと変えられないことの区別を生きること
- ・ 現在の解けない謎を生きること
- ・ 現在の解決のできない問題を生きること
- ・ 喪失による成長が可能であること
- ・ 人間が平等でないことを認め生きること
- ・ 善悪、善意と悪意・悪用・罪・負い目・償い・弁償・補償・許し・和解など（例、毎日の新聞に反映されている世界や社会の出来事）に目を向けること
- ・ 自己の統一が不完全という有様に対する和解と受容（例、ぼろぼろの自分を受容し、人生を終わる人物）

を人間同士として取り組み、これらの苦しい状況、特に極限状況を理解し（悟り）、受容によって平安に至る道を（苦しみながらも）追求し、同伴者として関わっていく努力である。と言っても誰でもできるものではなく、スピリチュアルケアは専門職であることを強調したい。

スピリチュアルケアは解決のできない困難に対して、気やすめや決まり文句で応えることなく、病む人との、仲間としての関わり方を理論と病院での実習を通じた徹底的な教育

² 世界保健機関 編 埼玉県立がんセンター病院長 武田文和訳、金原出版株式会社 1993

訓練に基づく職業である。欧米ではスピリチュアルケア・ギバー (spiritual care giver) を「チャプレン」と言い、それは宗教の有無に関係がない。

スピリチュアルケアの核心は傾聴による自己理解、人間としてのコミュニケーションのスキル、それに価値観や信念・信条の明確さ、堅実な性格などである。「チャプレン」の仕事は基本的にチームワークであることを念のために言い添える。

スピリチュアルな痛みの具体例

1. **変えられることと変えられないこと**：例、死と死ぬことは変えられない事柄だが、それらに対する考え方やとらえ方、視点は変えられる。一日は24時間しかないこと。両親から生まれ、ある家族のメンバーになったこと。歳をとり、衰えていき、死ぬことなどの現実を変えられないこと。こうした事実に対する見方は変えられても、その現実を変えられないことは痛みになりうる。特に、物事、存在そのものについて熟慮・熟考する人の痛みになりうる（例、文学者、哲学者、美術家、劇作家、音楽家など）。
 2. **現在の解けない謎**：例、巡り会いや出会い・友情。謎の中には心地よい謎もあれば、心地悪い謎もある。心地よい謎は健康、能力、健全な家庭、職業と仕事、国籍や平和、それらに対して病弱体質、頭脳の能力の無さ、離婚、自死、失業や無職、貧困、難民、迫害などは心地悪いものである。
 3. **現在の解決のできない問題**：例、知的障害児を自分の子として受容すること。エイズやアルツハイマー病などの難病、戦争・内戦や憎しみ・分裂、原理主義とのディスカッション、人種差別、人間の平等、裕福と貧困の均衡、社会福祉の公平な配分。
 4. **喪失による成長が可能であること**：例、身体の不自由さにもかかわらず心の温かさがある。意識した時間の過ごし方。財産を手放すこと。
 5. **人間が平等でないことを認め生きること**：例、生まれつきのIQや健康度合いの差
 6. **善悪、善意と悪意・悪用・罪・負い目・償い・弁償・補償・許し・和解など**：例、毎日の新聞に反映されている世界や社会の出来事
 7. **自己の統一が不完全という有様に対する和解と受容**：例、ぼろぼろで理想的でない自分を受容し、人生を終わる人物
- などはスピリチュアルケアを必要とするスピリチュアルな痛みとして考えられる。

スピリチュアルケアの実践

「しかたがない」「お大事に」「皆そうです」「人間ですから」のような決まり文句や問題点をうわべだけで片づけようとすることはスピリチュアルケアではない。スピリチュアルケアは教え込むことではなく、適切な援助を提供することである。

スピリチュアルケアにはマニュアルがなく、スピリチュアル^内な^面な^的な生き方をめざし、送ろうとする人だけがわずかにできるのである。特に死ぬことと死に対してはそうであろう。死ぬことや死に対してリーダーシップを取れるのはその専門家となった死に臨んでいる人だ

けである。

具体例を取り上げる。エリート大学を出た一人の医師は、重病の同級生を見舞いに行き、「もう来なくてよい」と言われてショックを受けた。それは不思議なことではない。というのはその人が最期の時に、「どうですか」「大変ですね」「又来ます」「頑張ってください」「お大事に」という次元での関わり方は物足りない行為だからである。逆に、日々、人生の意義を熟考し、意識的に生きてきた人は病む人間同士として出会い、お互いのバイブレーションによって“出会いの関係”ができることを感じ、心をオープンにし、今を、有益なひとときになるように共に過ごそうとするかもしれない。実例で紹介しよう。

2006年のはじめ頃、わたしの神学校時代の同級生 **G氏**は、老人ホームから市内のある病院に入院された。老人施設のチャプレンや入院の知らせを聞いた同僚や入院病棟の看護師から、「彼は寝てばかりいて反応がない」ということを耳にタコができるほどわたしは聞かされていた。それにも関わらず彼を訪問した。病棟で彼の病室を探しながら看護師に会うと、やはり「彼が寝ているばかりで反応がない」と言われた。ところが、訪室して彼に挨拶をすると手を振って挨拶を返してくれた。

わたしは日本で、彼はドイツにおいて活躍するようにそれぞれが任命されたため、彼にはその **50年**の間、ほとんど会っていなかった。

わたしは、神学校での思い出、特に彼の言ったことば (story) をテーマに、盛んに話した。途中で彼に「あなたはわたしと同じようにもう **50年間**も司祭として生きてきましたが、わたしたち司祭として大切なのは何でしょうか」と聞いてみた。彼はしばらくしてから「笑うこと (lachen)」と答えた。彼は確かにメランコリックなタイプだったが、顔には smile がよくあった。おそらくもっと「smile」が欲しかったのだろう。

わたしは「彼はあまり水分を取れない」とも言われたが、わたしは彼にお茶を飲ませた。そのとき、わたしの下手なやり方で彼のパジャマにお茶をこぼしてしまったこともあったが、彼は何も言わずいやな顔もしなかった。

一週間後再び彼を訪問した。そのとき彼は挨拶と話ばかりではなく、一緒に **50** 数年前の流行歌をも歌った。それどころか、わたしがすっかり忘れていたその流行歌のリフレーンさえも彼は覚えていて、喜んで一所懸命に歌ってくれた。その後、彼がわたしに「知っているでしょう」のような合図をしたので、わたしはそれがやっとな子供の歌であることに気づき、彼はそれも一緒に喜んで歌った。

彼は会うときに、ベッドの囲いより挨拶として手を出してくれた。挨拶してからしばらくわたしは彼の手を持ち続けた。彼が「もう十分」と感じたときも、同じく手を囲いより出したが、それは「バイバイ」の意味であった。

彼が老人施設に戻ってからもわたしは3回訪問したが、そのうち一回だけはほとんど話ができなかったことにかかわらず、共にいさせてもらった。彼は今年の **5月**に **83歳**で旅立たれた。

スピリチュアルケア・ギバー

スピリチュアルケアは、不思議がる心を持ち、意識して生きる人を要求している。スピリチュアルケア・ギバーは、

わたしは *BROKEN* (めちゃくちゃ) で、不完全で、身体・心・魂が一致していない状態にある！

わたしは身体・心・魂が統合されたひとりの人間でありたい！

わたしはそのバラバラな状態から解放させてもらいたい！

わたしは「*WHOLE** 一体」・「*HOL Y* 清らかなもの」でありたい！

わたしはわたしでありたい

わたしは自然のままの自分でありたい

わたしは本来の自分自身でありたい

わたしは自然のままの簡素な生活をしたい

わたしは完璧なものではなく、ありのままの自分でありたい

わたしは偽者ではなく本(物)者でありたい

という内面的な叫びを体験している人である。

* *whole* と *holy* とは同じ語源である。